

夢のかけはし

もともと本を読むことが好きで、宮崎市の大学を卒業した後印刷会社に就職しました。郷土出版物や情報誌などの編集をしながら活字と接していましたが、この頃はまだ自身で詩を書くことは考えていませんでした。

その後、鹿児島に帰郷。社会保険労務士の勉強の傍ら、詩を書くようになりました。文学を専門として学んだことはなく、完全に独学でのスタートでした。

2006年「南日本文学賞」を知り、初めて応募。その年は最終選考で敗れてしまいました。翌年に再び応募し、受賞を果たしました。受賞はしたものの、審査員の方々から厳しい意見をいただ

き、実力不足を痛感しました。

その後、全国的に注目を浴びている鹿児島県在住の詩人、高岡修さんに自作の詩を送ったところ、新聞等で紹介してくださったため、それが自信につながり、少しずつ詩を書き溜めて『猫を拾えば』（2012年）、『時間になりたい』（2016年）の2冊の詩集を出版。特に2冊目の詩集は、かつて谷川俊太郎なども受賞した「資生堂現代詩花椿賞」の最終候補まで残り、思い入れのある詩集となりました。

そして昨年、南日本文学賞に再度応募。過去の受賞者でも応募ができること知ったため、今の実力を確認するためでもありました。

2020年度南日本文学賞（詩部門）受賞者

うるし山 千尋 さん

が、ありがたいことに2度目の賞をいただきました。

音楽が音や響きを使い、絵画が色彩や線を使って世界を表現するように、詩は「言葉」を使って人間や世界を表現する芸術です。

なかなか一般の人には理解し難いところもあり「読んだけどよくわからなかった」と言われることもよくあります。しかし、そういったややこしいところが詩の本来の魅力です。

作品に対する感じ方は人それぞれですが、たとえ頭には残らなくても、読み終わった後、心がほんの少し昨日までとは違った動き方をしてくれば、それが私にとって一番の成功だと思っています。



【右】執筆にはパソコンを使用し、1冊の詩集に原稿用紙約50～60枚分を書くという。

【左】自費出版の詩集。今秋に3冊目の詩集を発行予定。なお、今回南日本文学賞を受賞した作品は6月未まで南日本新聞社のホームページで閲覧が可能。



▲南日本新聞社ホームページ

昨日までとは
違った心を届ける

錦江町出身、鹿屋高校卒業。本名はペンネームと同じく橋山 千尋。現在は新川町で「かさも社会保険労務士事務所」の所長を務めており、休みの日は高校で始めたギターを弾いたり、漫画を読んだりして過ごす。（44歳）